

さくらタイムス 令和6年6月号

お題は「命を守る」です。振り返って自分がどうやって守られてきたか。30年前のアメリカ単身生活は楽しくも危険なことが少なからずありました。凍死寸前（HP 令和5年12月号）や、時速200キロで突然前輪が爆発？し、車体は傾きハンドルが制御不能や、反射板も十分でない夜のハイウェイを高速運転中マニュアル車のトップギアでクラッチが壊れるといった危機でした。そうした「人生お初」の非常事態でも不思議と「死の恐怖」だけは感じず、「何とかする！」と頭と体力の全部を使って、荒れ狂うハンドルにしがみつき、徐々にスピードを落としてガードのない道の崖すれすれで停まり、ギア変速できずとも、ブレーキだけの操作で2時間近くを運転して自宅にたどり着いていました。運転は好きでも車の知識・技術のない自分がどうして恐怖でフリーズせず対処できたのか、当時から変わらず言えるのは「父母のおかげ」ということです。

両親はいつも目をきっちり合わせて話してくれました。父の目は「温かく茶目っ気」があり笑っていました。母の目は「凜としてすべてを包む愛」に満ちていました。二人ともその「目力」に加えて、幼い私を抱き寄せたり分かりやすい言葉で語り掛けたりで、「愛しているからおまえは大丈夫だよ」としっかりと伝えてくれました。

先のような危機的状況でパニックの瞬間に感じたのは、体温の下から湧き出る暖かい熱のようなもので、固まっても仕方がない思考と手足を自由にしてくれました。その熱の源としてイメージで浮かんだのが「父母の目」だったと覚えています。

こうした目に見えないエネルギーは将来「量子力学」で証明してくれると期待していますが、それを待つまでもなく、「親の愛が持つ力」の実例は山ほどあると思います。

さくらでは、大園長が子ども達の集中を誘うのに「おめめをつよおくしてね」と言い続けていました。

今でも朝の玄関で保護者を送るときに「おめめを見てバイバイ」するのが習慣になっています。保護者が

そばにいれば何としてでも守ってもらえますが、見える範囲から離れる時には、必ず「愛に満ちた目」から  
いざという時に自分を守る「力」をいただけるよう、そしてそれをしっかりと受け止められるようにと  
願っています。そしてこの力で子どもたちはいついかなる時でも「守られる」と確信しています。

毎日朝のお忙しいお出かけ前に愛を「贈って」くださって本当にありがとうございます。

園長 山内 香幸